

2

志さえあれば、

どんな目標も

かなえることができる。



夫れ志の在る所、気も亦また従したがふ。

志気の在る所、遠くして至るべからざるなく、
難かたくして為なすべからざるものなし。

(未忍みにん焚稿ふんこう 弘化三年)

■現代訳

志さえあれば、やる気はついてくるものだ。
志ややる気さえあれば、どれほど遠くにある
目標でも、かなえることができるはずだ。

「志」を胸に抱く

幕末は、日本の歴史において有数の変革期であり、転換点であった。その幕末で時代を担ったのは、志士とよばれる者たちである。江戸幕府の権威が衰え、外国からの圧力に日本が揺らぐ中で、彼らは、これからの日本はどうあるべきかを考え、行動に移して、近代日本の基礎をつくりあげた。この一大事業を成し遂げた志士たちには、共通点があった。彼らの心の中に、志があったことである。

もちろん志とは、国家の問題に限定されるものではない。医者になつて多くの人を救いたいというのも、一人前の武士となつて藩主に仕えたいというのも、やはり志なのである。そして、志があれば、どれだけ困難な道でも乗り越えることができる。だからこそ松陰は、医学修行に旅立つ友人、*1松村文祥まつむらぶんしょうにこの言葉を贈ったのである。

当時の松陰は十七歳。山鹿流兵学の師範という志を立てて勉学に励み、*2独立師範を目指しているころであった。

*1 松村文祥

松陰の叔父である玉木文之進たまきぶんしんが主宰していたころの松下村塾で、松陰とともに学んだ学友。

*2 独立師範

後見人などを立てず、自分で講義などを行う一人前の教授。